

住む私も同じひとつの海を共有しています。辺野古の海にいらない基地は他のどこにも必要ではないのです。

沖縄の基地で戦争の訓練をした兵士達は、今もどこかで誰かを殺しているかもしれません。これ以上命を奪う基地を作らせないために、私達自身が声を上げる時が来ているのだと思うのです。

### 声を上げる、ということ

「戦争は嫌だ」と思っている、それを声に出さないと自動的に「戦争は嫌じゃない」側の人達の仲間になってしまう時があります。「投票」というちゃんと声を出す権利があるのに、それを放

棄してしまう人もいます。

でも、新しい基地を作るために使われるお金は私達の税金です。税金を支払っている限り私達は基地とは無関係ではないし、戦争にも加担しているのです。

私は声を上げて「私の税金をそんなことに使うな～～！」と言いたい！そんなことのために私は納税しているのではないのです。そして「戦争は嫌だよ」と大きく声を上げたい！私達はまだものが言えるチャンスをたくさん持っているのです。私達が声を出さなくなり、本当に「ものが言えなくなる時代」こそが戦争をつくるのです。だから、「戦争には行くな、選挙に行こう！」



無添加漬物 風来 店主  
西田 栄喜

### 価値観を変える農

サービス業、ホテルの支配人業をやってきた私が「農」を選んだ最終的な理由は漠然とした不安である。豊かで物は溢れているけど何となく不安。そんな人が今の日本では多いのではないだろうか。

私は現在、石川県能美市で日本一小さい農業を経営、実践している。

正直、若い頃は農業にうらびれたイメージしかなかった。25歳の頃、一年間オーストラリアに遊学した。その時に出会った農家達は皆、自信に溢れていた。「私達がいなければこの国は餓える」のだと。そして農家に限らずあちらでお父さんといえば、庭の手入れをし、車を修理し、家を直せる、また家を建ててしまう人も結構いた。それに比べると今の日本人はなんと脆弱なのだろうかと

思ってしまった。

生活力というと日本では経済的に豊かであることである。しかし本来の生活力とは衣食住を賄えるということではないだろうか。あくまでその代替手段がお金なのである。衣食住のほとんどを輸入に頼る日本。そこに漠然とした不安を感じる人が多いのではないだろうか。その不安からイザという時、老後のためと貯蓄をしているのではないだろうか。だがそれでは根本的な解決にはならないのでいつまでも不安がぬぐえないのである。

そこで文字通り地に足がついた職業ということで農家、農的暮らしをしたいということで新規就農や定年帰農も一時期ブームのようになった。しかし行政は相変わらず「拡大再生産」の方向しか示さず農的暮らしをしたい人とのギャップが大きくある。そして就農しても途中で挫折する人も後を絶たない。

なぜそのようなことになるかということ、やはりこの経済至上主義の流れにいつのまにか流されてしまうからである。農的暮らしを望んだのにいつ

の間にか野菜の生産・販売に追われる。「拡大再生産」で成功するのであれば、ここまで日本の農業が廃れる訳がない。そこで農的暮らしの良さとは何かを今一度考える必要があると思う。そんな中、ひとつの方法として提案したいのがミニマム主義である。

## ミニマム主義

日本の農業試験所に勤める、第一人者が東南アジアのとある国に行った時の話である。その地では10アール（1アールは10m×10m）あたりのお米の収量が平均3俵（1俵は60kg）であった。そこでその人は日本では10アールあたりお米は平均8俵穫れると自慢した。現地の人々の感嘆の声を期待していたのだが、返ってきた答えは「それは搾取し過ぎである。畑の精霊に叱られる」だったそうだ。

確かに私達は今、生産性が高いもの、速いもの、収量が多く穫れた時を良しとしているがそれが本当に正しいのかどうか検算する時期にきているのではないかと思う。そういった視点を持ち、農で自然に教えられ、ミニマム主義という考え方が出来てきた。ミニマム——直訳すると「最小」「最小限の」である。つまりミニマム主義とは足るを知るということである。

そんなミニマム主義を実践してみると“スモールメリット”が沢山出てきた。反対語のスケールメリットは簡単に言うと大量仕入れで安く買い、大量販売することで利益を得るといえるものである。今の主流の考え方であろう。しかし大量仕入れであるがゆえに品質も均一なものしか手に入らない。

その点、自然の恵みである農作物は本来均一であるはずがない。タイミングやネットワークによっては非常に良いものが手に入りそれを提供することが出来る。そして面積、規模などある程度制限することによって土地活用、時間の効率もアップする。大きな機械を買う必要がないので借金す

る必要がなくなる。そして地域の間人間関係も小さいということでスムーズである。

ミニマム主義の中で最大の特徴が「目標基準金額」である。「目標基準金額」は基準金額のプラスマイナス5%以内に売上をもっていこうとする考え方である。基準とする金額5%以下の売上であれば反省をするのは、普通の目標金額と変わらない。しかし、基準とする金額5%以上の売上があった時も「働きすぎた〜」と反省して自制につとめなければならないというのが特徴である。

この「目標基準金額」、実践してみると、やるべき事がハッキリと見えてくる。何より販売のストレスが解消される。何せある程度売らなければならないという方向性がないのである。

そんな「目標基準金額」は川下からの発想を経営に応用したものである。何をやるにしても目標が必要であると思う。一般的な経営の場合も金額目標はあるにせよ、その先がないよう思える。なぜ、その金額が必要なのであろう。それを考えないから、前年対比何%アップなどと、とにかく売上金額を増やしたいという方向になってしまうのではなかろうか。

ミニマム主義において、真の目標とは「幸せに暮らすこと」である。農的暮らしの中で幸せに暮らしていくには、どのくらいの収入があれば良いのか？そこから逆算していくと目標基準金額が見えてくる。そして自給自足が出来る農的暮らしにおいては目標基準金額はどんどん下がってくる。

農家は収入が少なくても豊かな暮らしが出来る。それを収入が「少なくても」ではなく、収入が「少ないからこそ」と前向きにとらえると精神的にも豊かである。

お金はあくまでも幸せになるための手段である。今、日本ではその目的と手段が入れ替わってしまっているのでは、とにかくお金をとってしまうのではないかと思う。まわり道をする必要はどこにもないのである。農的暮らしなら直接、幸せが手に入るのでは。

そこで農的暮らしの良さ、農の豊かさを改めて考える必要があると思う。漠然と農的暮らしだけではある程度のイメージしか湧いてこない。そして良さを具体的に示すことにより農的暮らしを実践している人達自身が自信をもてるし広めていくことも出来る。

先ず私は農的暮らしの良さを公私混同出来ることであると答えない。公私混同は一般的には悪い意味で使われている。もちろん公金流用などは論外である。そういった意味ではなく、精神的な公私混同である。今の日本人はダブルスタンダードを取る事が当たり前になっているよう思う。

多くの人は職場の自分と家にいる自分を使い分けていないだろうか。会社の利潤と自分の心がずれていても「公」と「私」を使い分けることにより自己矛盾を起こさないようにしているのではないか。結果、社会全体に不利益なことでも出来てしまっているよう思う。

環境問題のNGOの会でも、パートタイムナチュラルリストが沢山いる。その時は素晴らしいことが言えるが、普段の仕事でやっている事と言っている事が合わない。それも「公」と「私」を分けているからであろう。仕事と生活が密着しているミニマム主義農家では、そういった場での発言も責任があるので、おいそれと美辞麗句は言えない。

また子どもに家の手伝いをさせられる。それは今、非常に贅沢なものではないかと思う。農は生き物相手である。感性が研かれ、知識だけでなく知恵も身につく。そして真の意味で生活力のある子が育つのではないかと思う。大げさではあるが、農こそ最高の教育の場であるとも言える。

ミニマム主義農家は公私混同する。つまり農が生き方なのである。これが農的暮らしである。「公」の自分も「私」の自分も本当の自分であったなら、自己矛盾も起こらない。もちろん責任はともなう。しかし24時間、本当の自分であるということが本来の姿ではないだろうか。

## 価値観を変える農

冒頭に書いた「漠然とした不安」は農業について解消出来たか？と言われると解消出来たといえる。それだけ「食を賄う」というのは人に与える心理的影響も大きい。しかしそれに代わり、この国、世界に対して確信的な不安が出てきた。だが確信的な不安が出てきて初めて、人は行動するのではないかと思う。農には人を変える力がある。

私自身、土を触るまで食に興味はあれ、環境や政治にはそれほど興味はなかった。しかし無農薬農業をしていくにつれ、「自分だけが無農薬でも意味がないのでは」と環境に興味を持ち始めた。そして今の農政を知るにつれ、これはおかしいと政治に興味が出てきた。また何かあった時、競争社会ベースの今では奪い合いになるのではないかとコミュニティの大切さを思った。そして何より最終的には自然にはかなわないと自然に対する畏怖の念が出てきた。この畏怖の念が失われてきていることが現代のすべての元凶ではなからうか。

すべての人が急に農的暮らしをするというのは無理があるだろう。しかし少しでも土を触ってもらいたいと思う。自然の脅威や収穫の喜びから、自然への畏怖を感じる。この共通認識こそが、これからの問題解決への始まりではなからうかと思う。価値観を変える近道、これがこれからの「農」の役割である。

### 【筆者プロフィール】

西田栄喜 (にしたえいき)

1969年生まれ。大学卒業後、バーテンダー、オーストラリア遊学、ビジネスホテル支配人業を経て地元石川で就農。一年間の研修期間後独立。無添加漬物 風来 (ホームページ <http://www.fuurai.com>) 店主 (通称・源さん)

サービス業の視点での農を実践中。